



KOBE  
university

STYLE

神戸大学

2010 AUTUMN Vol.14



# KOBE UNIVERSITY STYLE

## INDEX

|   |    |
|---|----|
| 特集 神戸大学応援団総部<br>一体感を求めて50年 .....                              | 1  |
| 特集 小林誠氏講演<br>何を学ぶか .....                                      | 8  |
| 特集 発達科学部・人間発達環境学研究科<br>未来につなぐ、「ハッタツ」の力 .....                  | 10 |
| 同窓会・学友会・育友会<br>『神戸大学百年史』全4巻が完結<br>育友会全学懇談会を開催／学友会幹事会を開催 ..... | 16 |
| 保健管理センターだより<br>長引く咳に注意を！・・・忘れていませんか？結核のこと。 .....              | 18 |
| 歴史のひとこま<br>神戸大学のキャンパス〈その1〉六甲台地区 .....                         | 20 |
| 神戸大学の愛唱歌<br>ニューカレッジソング「光と風のハーモニー from Kobe」 .....             | 21 |



特集・神戸大学応援団総部

# 一体感を求めて50年

学部だけで1万2千人の若者が学ぶ神戸大学。

全国有数の総合大学だが、

キャンパスに活気が満ち溢れているかという、意外に静かだ。

学びだけでなく、元気よく課外活動にも取り組み、

またみんなが神戸大学生としての一体感のもと、

生き生きとしたキャンパスライフを楽しもう——

こんな願いをこめて応援団総部が生まれて50年。

たこ足大学から真の総合大学を目指す神戸大学の歩みを

応援団総部の活動を軸に振り返る。



## ～創立～

# 応援団を生んだのは、 母校を思う熱い心

神戸大学応援団総部初代団長

## 菅 正徳

昭和37年、経営学部卒業。三菱商事に入社後は、商社マンとして活躍。昭和63年に三菱商事を退職後、日本フェース株式会社を設立し、代表取締役役に就任。現在に至っている。  
昭和35年、いわゆる「60年安保」の年に生まれた神戸大学応援団総部の初代団長として、応援団の立ち上げに尽力し、50年以上に及ぶ歴史の礎を築いた。



## 連帯感を生み出す

私が入学した昭和33年。当時の神戸大学は、私がいうのはおこがましいかもしれませんが、「世のエリート」としての気風が漂い、戦後の日本再興を支えよう、という意気盛んな空気感に満ちていました。

ただ、学舎が六甲、御影、住吉、長田、姫路など、各地に分散していたせいも、学生の熱気やエネルギーまで分散しているようで、一体感が今ひとつ体感できずにいました。同じことを感じていた同士8人が集まり、大学の一体感を求めたのが、応援団の始まりです。

当時、関西の大学野球リーグは、「関六」と呼ばれる6校を中心としていました。この中で、神戸大学と並ぶ国立大学である京都大学に、3年前、応援団が誕生したことに刺激を受け、野球を盛大に盛り上げることで、わが校の総合大学としての連帯感を生み出そうとしたのが、応援団の最初の動きだったと記憶しています。

## OBの熱気が動かし

どうい応援団をつくれればよいのか……。具体的な応援団像を追い求めた時、羽織袴の古典的な応援団ではなく、東京の早慶戦で見られるような、近代的な応援スタイルを関西で実現したいと思い描きました。そのためには、プラスバンドが不可欠であり、資金として寄附を募る必要がありました。

その頃、関西圏に本社のある商社の社長は、ほぼ神戸大学のOBで占められ、関西の経済力たるや相当なものでした。そんな日本を動かす経済人に、私たち学生が寄附を求めに行くのですか

ら、何とも大胆です。しかし、意外なことに、先輩方のほとんどは気持ちよく寄附をしてくださいました。今考えると、母校への誇りに満ち溢れていたOBの方は、将来への期待とともに、母校の現状にある種の疑問があり、応援団のような組織の誕生を待望されていたのかもしれませんが。

自分たちが立ち上げた応援団ですが、「神戸大学を育ててやろう」というOBの熱意と時流によって、必然的に生まれたという気がしてなりません。

## 独自スタイルの応援団

当時、応援団がぶち上げたのが「神大人意識の高揚」。単なる運動部の応援部隊ではなく“大学全体の意識を高揚する象徴”となる必要があると感じていたからです。学内の自治を仕切る全学自治会、運動総部、文化総部と対等で、独立した存在であるとアピールするため「応援団総部」と名付け、文化部への応援や文化祭の後援など、大学全体にかかわる活動を推進しました。一部ではなく全体とかかわることに、神大応援団のこだわりと独自性があったわけです。

## 母校を誇りに

何事も、50年続けるのは難しいことです。いくらきれいな学舎が建とうと、景色が良かろうと、大学において学生以上に大事なものはありません。大学と人にエールを送る応援団は、大学好き、人好きの集まりです。それが応援団の良さであり、50年続いた秘訣ではないでしょうか。学生が母校に誇りを持つことができるように、当時の応援団精神が伝統として受け継がれることを、一人のOBとして願ってやみません。

(まとめ・広報室)



## 入学式



## 学位授与式



入学式のセレモニーが終わった後、颯爽とステージに登場し「学歌指導」を担当するのが応援団総部です。チアリングファイなどで場内を和ませた後、吹奏楽部の演奏のもと、少しずつ歌詞を区切って新入生に歌ってもらい、最後にとおして学歌を歌い、エールを行います。新入生に神戸大学生になったんだという実感を味わってもらえるはず。学位授与式でも社会に羽ばたく卒業生に壇上からエールを送ります。卒業しても神戸大学を忘れず、神戸大学で学んだ誇りをずっと持ち続けてほしいという願いをこめています。

## 神京戦



硬式野球神京戦は伝統の一戦です。1931年関西六大学野球連盟発足以来、神戸大学と京都大学は国立大学同士ということもありライバル校でした。応援団総部が創立して最初に大がかりな応援団を組んだのも京大戦です。62年の入れ替え戦実施後はリーグを異にして戦うことはなくなりましたが、71年に定期戦として復活しました。いま、毎年夏に交互のグラウンドで試合を行い、応援合戦も続いています。定期戦の通算成績は2010年現在、神戸大学の20勝16敗1引き分けです。

# 応援団と神戸大学の歩み

黄色：応援団 白色：神戸大学

## 1949 (昭和 24)

- 神戸大学設置（文理学部・教育学部・法学部・経済学部・経営学部・工学部の6学部と附属図書館、経済経営研究所。神戸と姫路に分かれていた教養課程も含め、学舎は東灘区、灘区、長田区、姫路市に分散していた）

## 1954 (昭和 29)

- 文理学部を廃止し文学部・理学部を設置

## 1955 (昭和 30)

- 創立記念日を5月15日と決定

## 1957 (昭和 32)

- 全学統一の開学記念祭を初めて開催

## 1960 (昭和 35)

- 六甲台学舎に隣接する敷地で工学部学舎新営工事が着工。学舎統合事業の始まり。62年に移転完了
- 応援団総部設立。運動総部（現・体育会）、文化総部などは独立し、総務部、リーダー部、吹奏部からなる
- 関西六大学野球春季リーグ入場式に参加。秋にはバス2台で150人を動員し西京極球場で京大戦を応援

## 1961 (昭和 36)

- 開学記念祭を大学祭と改称
- 応援歌「宇宙を股に」を制定し、卒業式で発表。「団誌」（年刊）を創刊
- 大学祭園遊会を企画・運営
- 神戸大学文化フェスティバルを支援

## 1962 (昭和 37)

- 週刊「神大 BRICK」創刊

## 1963 (昭和 38)

- 教養部を設置し御影分校を廃止。姫路分校は64年に廃止
- 教養部学舎新営工事が鶴甲で竣工
- 「団誌」を「BRICK」と改称。大学総合雑誌を志向
- 新応援歌「栄光は常に我らに」制定
- 文化総部大運動会を後援

## 1964 (昭和 39)

- 学生歌「この丘陵に」を制定
- 文学部・理学部の学舎が竣工し六甲台へ移転
- 兵庫県立神戸医科大学を移管し医学部を設置

## 1966 (昭和 41)

- 兵庫県立兵庫農科大学を移管し農学部を設置
- 学生会館が開館

## 1967 (昭和 42)

- 農学部が篠山学舎から六甲台学舎へ移転

## 1968 (昭和 43)

- 教育学部学舎新営工事が竣工し鶴甲へ移転。六甲台への学舎統合事業が完了
- 大学紛争が始まる

～現在～

# 応援団総部の皆さんは・・・

## 応援と音楽性の追求について

私たち吹奏楽部は、演奏会活動と応援活動の二つを軸に活動しています。普段は演奏会に向けて日々練習を重ねており、応援では演奏面を一手に引き受け、演奏によって観客の意気を高め、選手に力を与えています。

演奏会も応援も一見同じ演奏をしているように見えますが、実際はその演奏の「質」が異なります。演奏会ではホールに合わせた響きのある音を目指しますが、応援では野外向けの、よりパワフルな勢いのある音を目指さなければなりません。音楽性を追求しようとすると、えてして前者に偏ってしまい、応援ではパワー不足な音になりがちです。このように応援と音楽性の追求の両立は、私たちが常に課題にしているところであります。

この対立する二つの活動をなぜ50年間続けてこられたのでしょうか。私は応援団と吹奏楽部の「一体感」にその答えがあるように思われます。応援では、「絶対に勝たせよう！」という共

通の思いをもって必死で応援し、演奏会も応援団と共にその成功を目指しています。この「一体感」が大きな原動力になっています。これからもさらなる「一体感」を目指し、活動をしていきたいと思います。

吹奏楽部長 藤原 和樹 (法学部3年)



## チアの楽しさとは

わたしは、大学に入って初めてチアを始めました。いざ練習してみると、チアリーダーの華やかさとは裏腹に、体力も筋力も必要なものだと痛感しました。

そして、チアを始めたばかりの頃にいちばん大変だと思ったのは、いつも笑顔でいることでした。試合で選手たちを元気づけるためには、応援する側の人間がいちばん元気でなくてはならないと先輩方に教わり、チアリーダーとして、ひとりの人間として、笑顔でいることの大切さを知りました。笑顔のパワーはすごいものだと思います。

わたしたち神戸大学応援団総部は、チアスピリッツに重きを置いて活動しています。でも、自分が選手たちの力になれたと、自信を持って言える瞬間はなかなかありません。それでも選手の方からお礼の言葉を頂いた際には、チアをやっていて良かったなあと心から思います。

これから、みんなに元気を与えられるチアリーダーになり、団員自

身もまわりの人も楽しいと思えるパワフルな応援団総部をつくっていきましょう！

KOBE We Are No. 1!!

チアリーダー 渡邊 紗彩 (医学部3年)



## なぜ学ランを着るのか

応援団のリーダーは学ランを着ています。なぜ学ランを着るのか、と問われると少し答えに困ってしまいます。というのも、応援団は学ランを着ている、というイメージが私の中で完全にできあがってしまっているからです。強いて言うなら、カッコイイから、もしくは今まで学ランをきて先輩のようにカッコイイ魅力的な応援団員になりたいという部分大きいのかもかもしれません。

加えて、対象に積極的に働きかける団体として、一目で「あ、応援団だな」と認識してもらえますし、所属を表す「ユニフォーム」としての優秀さ、学ランを着ることで生まれる存在感も大切にしております。

ただ、昨今の他大学の応援団の不祥事によってできてしまった悪いイメージや威圧感、機能性の悪さ(夏は暑く、冬は寒い)を考えると、応援団の服装を考え直す時期がきているのかもかもしれません。実際、現在私たちも六甲祭のことなどを伝えたりするピラ配りではウインドブレーカーを、アメリカンフットボールなどで観客の皆さんと一緒に

に応援する時はブリックカラーのポロシャツを着用しております。これからも、学ランのいいところを活かしつつ、さらに魅力的な応援団をつくっていきたいと考えております。

応援団長 山本 洋敬 (工学部4年)



## 六甲祭



神戸大学の学園祭の一つ、六甲祭はプロのアーティストによるコンサートや著名人を招いての講演会、たくさんの模擬店……、関西の学園祭のなかでも有数の規模を誇ります。以前は5月に、いまは11月に開かれています。応援団総部が創立以来、ずっと園遊会にかかわってきたのは、大学内外を問わず大勢の人に六甲台に集まってもらい、お祭りを楽しんでもらいたいためです。はじめは園遊会全体を主催していましたが、いまは六甲祭実行委員会からステージの運営を任されています。神戸大学ではこのほか、海事科学部の深江祭、医学部医学科の大倉山祭、医学部保健学科の名谷祭が開かれています。

## 歓迎演奏



2003年秋、神戸商船大学と神戸大学は統合し、神戸大学海事科学部が誕生しました。その記念式典に出席するため韓国の国立海洋大学校の練習船ハンナラ号が神戸港に入港した折り、応援団総部は高らかな演奏で歓迎しました。国立海洋大学校の皆さんに喜んでもらったと同時に、旧神戸商船大学生も神戸大学の一員であることを実感したことでしよう。

### 1969 (昭和 44)

- 大学祭が中止、「反大学祭」に
- 「反大学祭」の園遊会の主催をおこなう

### 1971 (昭和 46)

- 硬式野球神京戦が定期戦として復活
- 四団連祭始まる
- 硬式野球第1回神京戦を応援
- 四団連祭の園遊会を企画・運営

### 1972 (昭和 47)

- 第1回神戸大学音楽祭が開催
- 吹奏が活動分離。応援団総部は応援団と吹奏楽部に再編成
- 神戸大学音楽祭に吹奏楽部が参加

### 1973 (昭和 48)

- 大学本部管理棟が完成
- バトンを採用。6月の硬式野球神京戦でデビュー

### 1974 (昭和 49)

- 全学体育大会が開催
- 全学体育大会を後援

### 1976 (昭和 51)

- 新入生歓迎オリエンテーションで神戸大学歌カセットテープ「我らが愛唱歌」を発表

### 1979 (昭和 54)

- 全同窓会の連合体「神戸大学学友会」が発足

### 1980 (昭和 55)

- 全学的学園祭として六甲祭が復活
- 第三応援歌「燃ゆる想い」を制定

### 1983 (昭和 58)

- バトンからチアリーディングにシフト

### 1987 (昭和 62)

- 体育会と共催で第1回駅伝大会を開催

### 1988 (昭和 63)

- 体育会と共催で大運動会を開催

### 1990 (平成 2)

- アメフト国立大決戦(対京大戦)を応援。神戸大側スタンドに1万人が集結

### 1992 (平成 4)

- 教養部・教育学部を改組し国際文化学部・発達科学部を設置
- 創立90周年記念式典を挙行。「神戸大学学歌」制定

### 1994 (平成 6)

- 医学部保健学科設置

### 1995 (平成 7)

- 阪神・淡路大震災で学生・院生・研究生・教職員の計41人、神戸商船大学では学生・研究者計6人が犠牲に
- 「がんばろうやフェスタ」に参加
- 「元気が出るコンサート」を被災地で開催

### 1997 (平成 9)

- 「神戸大学応援団総部の35年-60年安保から阪神大震災まで」を発行

～未来へ～

# 他サークルに聞く応援団の存在とは

## アメリカンフットボール部

主将 庭山 篤 (工学部4年)

応援団の応援はとても心強く、いつも背中を押してくれているというのを試合のたびに実感している。どれだけ暑い中での試合であっても、どれだけ雨が降っていても、どれだけチームが厳しい試合状況にあっても、応援団は思い切り声を張り上げて私たちを鼓舞し、それと同時に、ゲームを盛り上げてくれる。そのとても力強い応援は、サイドラインだけでなくフィールドの中にまで届き、私たちを奮い立たせて、力を与えてくれる。

私たちと応援団は同じフィールドに立つことはできないが、「勝利に向かって一緒に戦っている」という想いをもって、ゲームに臨んでいる。

私にとって、この秋シーズンを戦い抜き、より良い結果を出すために、応援団は「必要不可欠な存在」であり、また、「共に戦う仲間」であると考えている。この2010年秋シーズンは、応援団と共に「今に懸ける」戦いをしていきたい。



## 六甲祭実行委員会

委員長 西村 圭司 (工学部3年)

六甲祭実行委員会とはもともとは応援団から派生してできた団体なので、今でも様々なイベントにおいてご協力いただいております。中でも応援団の方々にも最もお世話になっているのは、六甲祭当日に園遊会ステージの運営をお願いしていることです。園遊会ステージは来場者が最も多く通る第I学舎前で、来場者の方々に大学祭に来たという印象を与えつつ、最も盛り上げていただいている企画の一つとなっており、六甲祭アンケートの結果においても、多くの来場者からとても印象に残る企画として挙げられているほどです。一つひとつの内容に対して一生懸命な姿が、多くの来場者の印象に残ったのだと思っています。

六甲祭実行委員会としては、応援団の方々と一緒に六甲祭を盛り上げていく良きパートナー的な存在であり、これからもその関係を維持していきたいと強く願っています。



## 硬式野球部

主将 石浜 勇樹 (発達科学部4年)

一緒に戦う仲間です。応援団とは活動場所も近く、普段からよく顔を合わせます。挨拶せずとも会釈で繋がっている。会釈に「俺らも頑張るから、応援頼むで!」「全力で応援するから、試合勝ってくれよ!」というやりとりが込められています。実際、リーグ戦や神京戦といった大事な試合で、応援団は倒れそうになるぐらいまで全力で私たちを応援してくれます。自分が打席に立ったときや、ピンチを迎えたとき、何度その声援が力になったかはわかりません。

代々、硬式野球部と応援団はリーグの打ち上げを一緒に行います。私たちのリーグ打ち上げ3次会から応援団にも参加してもらうのですが、その場でお互いの労をねぎらい、また次の試合で頑張ろうと決起するとき、部活は違えど、共に戦う仲間なんだなあと感じます。これからは私たちに熱い声援を送っていただき、私たちはその声援に結果で応える。部活の垣根を越えた、強い繋がりでありたいと思っています。



## ニュースネット委員会

編集長 浅井 淳平 (文学部3年)

応援団創部50年、おめでとうございます。半世紀にもわたり脈々と受け継がれてきた伝統を考えると、改めて応援団の存在の大きさを感じずにはいられません。

部活動で他大学と競う、あるいはそのような人と接する。そんな機会に巡りあえば、自分が神戸大学生であることに深い感動を味わうことができるものです。しかし、一般の学生には、その機会は滅多にありません。

応援団の声、踊り、情熱は、「神戸大学」を身近に感じることでできない一般の学生と、部活動などに所属する学生を結ぶ橋渡しとなっていると思います。それは、神戸大学を盛り上げ、もっと活気のある大学にしていくために不可欠な役割です。今後も応援団の活動がますますの発展を遂げられることを願っております。



## 大応援



今年4月、「大応援」が王子スタジアムでありました。毎年開いている「新入生歓迎スポーツ・フェスティバル」の一環ですが、アメリカンフットボールの対大阪大学戦を応援団総部創立50周年の記念事業の一つとして、新入生はじめ在学生、教職員、OB・OGに応援の楽しさを味わってもらおうと企画したのです。福田秀樹学長、高崎正弘学友会長はじめ約700人が神戸大学応援席を埋め、大学のシンボルカラーであるブリックカラーのタオルを手に声援を送りました。新歓ではいまままでにない応援数でしたが、もっと多くの方が声援を送るなかで「神戸大学」を実感してほしいと、応援団総部は今後も働きかけていきます。

### 2000年(平成12)

- 学内かわら版「月刊 BRICK」発行

### 2001(平成13)

- 百年記念館が竣工 神戸大学の「学旗」制定
- 「神大交流の広場」を開設

### 2002(平成14)

- 神戸大学百周年記念式典・祝賀会を挙行
- ロゴマークを制定
- 創立百周年記念学生スポーツ交流試合を開催
- 神戸大学 OB・OG 会ネットワークが誕生
- 神戸大学創立百周年記念祝賀会に出演

### 2003(平成15)

- 神戸商船大学と統合し海事科学部及び乗船実習科を設置

### 2004(平成16)

- 国立大学法人法の施行に伴い、設置者が国から国立大学法人神戸大学となる

### 2005(平成17)

- 第1回新入生歓迎スポーツフェスティバルを開催。以後定期化
- 第1回新入生歓迎スポーツフェスティバルを応援

### 2006(平成18)

- 第1回ホームカミングデイを開催。以後、年1回定期化
- 「神戸大学ビジョン2015」を策定。神戸大学基金が発足

### 2010(平成22)

- 創立50周年記念事業としてニューカレッジソング「光と風のハーモニー from Kobe」を制定

※組織の設置は学部中心に紹介しています。

## 充実した学生生活を通して一体感を

神戸大学長 福田 秀樹

神戸大学は11の学部、14の大学院研究科をもつ総合大学です。人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命・医学系の4領域をカバーする学部・大学院にとどまらず、異分野の交流をめざし学内共同教育研究施設を持ち、また学部間の連携を強化して特色ある教育研究体制を整えています。学生の皆さんが学部の壁を越えて興味ある分野を学べるのが総合大学の強みです。

学びだけではありません。学部だけでも1万2千人もの学生を擁し、いろいろな個性、多様な関心を持つ者同士が切磋琢磨し、人間形成ができる環境に恵まれています。躍動感ある、充実した大学生活を送る中で神戸大学生としての一体感が生まれてくるのだと思います。



応援団総部は創立以来、「神大人意識の高揚」を掲げてきました。入学式では気合いの入ったステージで新入生を迎え入れ、体育系、文化系を問わずさまざまな課外活動の応援にも駆けつけ、サークル同士の交流の場を設けるとともに、大学祭の園遊会ステージを主催するなど多様な活動を行っており、また、学位授与式では卒業生をエールで送り出すなど、神戸大学を盛り上げようと頑張っています。

私どもは今後、神戸大学が総合大学としてますます発展するよう、全学をあげて取り組んでいきます。応援団総部に限らず学生の皆さんの活動に期待しています。

さらなる  
学生に期待

## 講演

# 何を学ぶか

ノーベル物理学賞受賞者で神戸大学経営協議会委員でもある小林誠氏が2010年4月6日、神戸ポートアイランドホールで催された神戸大学入学式で、記念講演されました。了承を得て載録いたします。

(まとめ・神戸大学広報室)



神戸大学経営協議会委員  
日本学術振興会理事

## 小林 誠 (こばやし・まこと)

1967年 名古屋大学理学部物理学科卒業  
1972年 名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士)  
京都大学理学部助手  
1973年 「小林・益川理論」発表  
1979年 高エネルギー物理学研究所助教授  
1985年 同教授  
2003年 高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所長  
2007年 日本学術振興会理事  
2008年 文化勲章  
ノーベル物理学賞  
高エネルギー加速器研究機構特別荣誉教授  
2009年 名古屋大学特別教授  
2010年 神戸大学経営協議会委員

神戸大学に入学された皆様、大変おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。今日は私が経験したこと的一端を通して、大学で学ぶというのはどういうことか、その意義についてお話したいと思います。

私が大学に入学したのは1963年、東京オリンピックの前年、まだ新幹線は走っていなかった、そういう時期であります。容易に想像できるように、当時に比べれば現在の科学や技術は格段に進歩しております。情報の量も伝達のスピードも全く違うわけです。一言で言って、皆さんが学ぶべきことは、当時に比べれば格段に増えています。これから学ぶ人は大変だなと、そういう風に思ってしまう。

そもそも、日々たくさんの人が膨大な研究をしてその成果を報告しているのですから、先人が残したものを全てなぞるようになど、学ばなければ次のことができないというのでは、幾ら時間があっても足りないわけです。そのところをどうしたらいいか、非常に単純化して考えれば、こういうことではないかと思えます。

ある分野の研究が進みますと、当然ある段階で、その研究領域について新たに体系的な理解ができるようになります。そこで起きる事象なり何なりを支配する法則がわかり、それをいかに適用すればいいかがわかりますと、これからどういう事象が起こるかってことも、あらかじめ予測がつくようになる。そういう段階まで来ますと、個々の事象を覚える必要はなくて、体系をマスターしていれば、それまでの成果を身につけることが可能になる。つまり、先人の成果をそういう一段高い位置に立って継承するというのが、学問なり知識の進歩の理想的な姿ではないか。実際、こうして学問というのは進化してきたのだという風に思えます。

ただ、そういう体系化された知識のその先には、まだその段階に至らない、いわば混沌とした領域というのが広がっていて、そこが研究とか技術の場合ですと最前線ということになる。知識の体系というのは固定化されたものではなくて、常に新たな研究成果を取り入れて、日々更新されていくものではないかと思えます。

## 知識は陳腐化する

知識そのものは、すぐに陳腐化します。今習った最新の知識も数年経てば書き換えられる、あるいはもう広く知られた常識になってしまう。その知識を持っていることに、それほど優位性がなくなるということはよくあります。ですから、大学や大学院で習得すべきことは何かということではありますが、その習得した能力を、その知識そのもので測るというのは危険なことです。その知識の背後にある、ものの見方とか考え方を身につけ、そういう発展に対してどう対応できるかという、そういう能力を身につけることが重要であります。新しい知識や情報がつけ加わったときに、それがどういう意味を持つか、あるいはどう位置づけるべきかと、それから、それがどういう進展を示唆しているのかとか、そういうことを判断する能力というのが求められているのだと思えます。



その際はもちろん、できるだけ多くの知識に基づいて判断するのが望ましいわけですが、これだけのことを知っていれば十分というような、そういうメニューがあるわけではない。これが、皆さんの高校までの勉強とは大きく違う点ではないかという気がいたします。

一人一人が身につける知識や考え方は、違っていいのかもしれませんが、それぞれにバラエティがあることによって、全体としてカバーする範囲が広がるわけですから、その中で問題解決の糸口が見つかる可能性が高くなる、というわけですね。この多様性というのは、それぞれの方が受けた教育とか経験の違いから、ある意味自然に生じてくるものであろうという気がしております。皆さんは神戸大学で学ばれることにより、自ずから他の大学で学ぶのとは違ったものを身につけられることとなります。その違いは大事にすべきものだという気がいたしております。

## 名古屋大学坂田研究室

ここから、少し私自身の経験をお話したいと思います。私は1967年に名古屋大学の大学院に進みまして、坂田昌一先生の研究室で素粒子物理の理論的な研究を始めました。当時の素粒子物理学は、新しい実験事実が次々出てくるけれども、それを説明する満足な理論がない。ある種、混沌とした状況にあったと言えます。

大学院を修了するころになると一変します。簡単に言いますと、素粒子に働く力の理論というのに対して、ある程度満足いく理論形式ができるようになった。要するにこの時期に、素粒子の研究は非常に大きく発展した、変化したわけでありまして。

この状況を受けまして、益川敏英さんと私が考えたのが「CP対称性の破れ」という現象についてです。粒子と反粒子に違いがあるということでありまして、その現象を説明するにはどうしたらいいかということを考えてあります。その一つの可能性として提案したのが、クォークというもの、当時3種類と思われていたものが6種類あれば、このスキームの中で説明できるということ、提案したわけでありまして。

このお話の中で申し上げたかったことは、研究の中身そのものではなくて、それが生まれた背景ということでありまして。背景として何よりも大事なことは、今申し上げまし

たように、素粒子物理学が非常に大きく変わる変革の時期に、たまたまでありますけど、めぐり合わせたということでもあります。一つのブレイクスルーというもの新しい可能性を切り開いて、重要な進展が次々に起きるといことはよくあります。まさにそういう時期に出会ったということが、この仕事ができただの理由であります。もちろんそれは、ほかの人より多少早くそういうことに気がついたということにすぎないわけでありまして、それが可能であった理由の一つは、先ほど申しましたように、私が坂田研究室で学んだということにあるのではないかという気がしております。

## アプローチの多様性

どういうことかと申しますと、クォークという基本的な構成要素が実在するという考え方に立つと、それを含んで素粒子の全体像をどう描いたらいいかということが問題になります。それを考えようという意識が坂田研究室の中には非常に強くあったのではないかと、単に便利な数学的な道具と考えるようなのは違った見方がそこにあったのではないかと、その結果、「CP対称性の破れ」を含む矛盾のない理論をつくるにはどうしたらいいかという問題意識が生まれたという風に思います。つまり、経験とか教育の違いによって生まれるアプローチの違いが、時として大きな結果の違いとなって現れることがあるという、一つの例ではないかという気がしております。

私が最初に申し上げたことの多くが、この経験から来ているものであるということは御想像がつくかと思っております。ただ、個人の経験を拡大して、一般的に成り立つというように考えるのは大変危険なこともありますので、いろいろな考え方があっていいわけです。ここでも、考え方の多様性というのが重要であるという気がいたしております。

私が今お話ししたことが、皆さんこれから大学で学び研究される上で参考になれば幸いです。学ぶとはどういうことか、この大学生活を充実したものにするにはどうしたらいいかということ、ぜひ御自分で改めて考えていただきたいと思います。



多様であることは「何でもあり」とは異なります。私たちは複雑な現実を前にして、人間や環境の発達・発展にとっての意義や問題がどこにあるのか、また、前進するためには何が必要かを問わずにはられません。

発達科学部・大学院人間発達環境学研究科（通称“発達”）は、この問いに対する答えを見つけるため、人間の発達（development）とそれを支える環境の発展（development）について教育、研究を行っています。その学習分野は多岐にわたり、文系と理系、アートやスポーツなどのパフォーマンス系学問を含み、原理的・応用的・実践的研究がコラボレートして、多彩な内容を構成しています。

学生たちは、多様な研究や実践に関わる中で、日々「人間的なるもの」を探究しています。学生たちが見つめる「人間」、また「発達」とは、一体何なのか？ 発達科学部の研究の一端を紹介することで、その答えが見えてくるかもしれません。

発達科学部長・人間発達環境学研究科長  
朴木 佳緒留（教育学・ジェンダー論）

## 発達科学部・人間発達環境学研究科

# 未来につなぐ、 「ハツタツ」の力

### 発達科学部

#### 人間形成学科

心理発達論コース  
子ども発達論コース  
教育科学論コース  
学校教育論コース

#### 人間行動学科

健康発達論コース  
行動発達論コース  
身体行動論コース

#### 人間表現学科

表現文化論コース  
表現創造論コース  
臨床・感性表現論コース

#### 人間環境学科

自然環境論コース  
数理情報環境論コース  
生活環境論コース  
社会環境論コース

#### 発達支援論コース

#### ESDサブコース

### 人間発達環境学研究科 〈博士課程（前期・後期）〉

#### 心身発達専攻

心理発達基礎論  
臨床心理学（前期課程のみ）  
健康発達論

#### 教育・学習専攻

子ども発達論  
教育科学論  
発達支援論

#### 人間行動専攻

行動発達論  
身体行動論

#### 人間表現専攻

表現文化論  
コミュニティアート（前期課程のみ）  
表現創造論（後期課程のみ）

#### 人間環境学専攻

自然環境論  
数理情報環境論  
生活環境論  
社会環境論  
環境先端科学（後期課程のみ）

## “発達”からの発信

「発達＝development」という言葉は、本来「包みを開く」という意味をもっています。人間、社会、自然…、あらゆるものがもつ「可能性の包み」を開き、混迷する未来を切り拓くため、日々発信しています。

### アートは人類を救うか？

私の研究領域は音楽療法です。それは隣接する即興演奏など、実践に必要な音楽技術や対象者の理解などの多くの領域を一つにまとめる形で成りたってきました。しかし、私が最近気になり始めたのは、音楽療法と呼ばれているものの考え方の土台です。音楽の力を使って人にプラスの影響を与えるという音楽療法の基本的な考え方の奥底には、どうしても私には西洋近代の考え方が潜んでいるように思えてなりません。

一方、アウトサイダーアートなど障害者等の表現は、芸術を目

的に使った芸術療法のようなものではなく、どんな人にとっても必要な生存のための行為として、芸術表現と療法を位置付ける、これまでとは異なったあり方にも気付かせてくれます。いま必要なのは、いわゆる近代芸術のイデオロギーを超えた、人の表現行為のための哲学ではないでしょうか？ 目指すは、決して〈生きがい〉などという言葉では片付けられない、生存に必須の行為としての思想です。

人間表現専攻(臨床音楽学) 教授 若尾 裕



サウンドスケープのフィールドワーク風景(授業「コミュニティ音楽」にて)



主催する音楽祭での作曲家トレヴァー・ウィシャートのワークショップ

## Development — 個人の発達、社会の発展

人が大きく変わる瞬間があります。バングラデシュの貧しい女性が自分で稼いだお金で家計を助けた時。フィリピンの農民が自ら育てた果物を消費者に高く評価された時。ケニアの学校経験のない女性が自分の名前を書けるようになった時。一人の人間として自信と尊厳を獲得する瞬間です。どうしたら途上国の貧困な人々が尊厳をもって自立的に生活できるようになるのか。どのような貧困対策がいかなる社会制度の中で効果を持つのか。計画がうまく機能しないのはなぜか。社会変革の原動力は何か。こうした問題をグローバル化に巻き込まれるフィリピン社会を対象として、政策、社会構造的な観点から考察しています。研究から派生し学生諸君と途上国貧困者の生活向上にむけたフェアトレード活動にも取り組んでいます。貧困者が変わる瞬間、さらには研究実践を通じ、学生自身が変わり成長する瞬間に携わる喜びに勝るものはありません。置かれた状況の違いを理解し相互に関わり

つつ発達・発展してゆくこと、それが発達科学部の追究するdevelopmentです。

人間環境学専攻(途上国政治経済) 准教授 太田 和宏



学生と草の根NGOとの交流(2010年3月 フィリピン セブ島にて)

## 進化し、深化する

多様な学びのスタイルは発達科学部の特色の一つです。従来の大学講義だけではなく、学生自らがさまざまな問題をさまざまな方法で解決するプロセスを学びます。失敗してもチャレンジしていく学びには、活気があふれています。

### トータル・アート・マネージメントの場「表現創造演習」

人間表現学科の授業科目である「表現創造演習」では、視覚、聴覚、触覚など、人間のさまざまな感覚に作用する総合的パフォーマンスを実施しています。これまで、音楽、美術、舞踊などを交え、授業の総まとめとして舞台公演を重ねてきました。2年にわたる授業では、アートが発現する場としての「もの・アイデア・身体」などを第一の軸として、アートを広げる方法としての「共同・評価」を第二の軸として、それらさまざまな要素の相互作用や、履修学生個々の能力を踏まえつつ、年度に応じた

内容を検討し、実施しています。企画書の作成・プレゼンテーションに始まり、アイデアの検討、広報・制作・設営などを経て、パフォーマンス実施後の評価に至る一連のプロセスは、さまざまに解釈され得る人間の表現行為を通じた、価値形成のためのケーススタディーであり、アートを媒体とした自己評価、他者理解、共同という「トータル・アート・マネージメント」の場として活用されています。

人間表現専攻(作曲・編曲・作品研究) 准教授 田村 文生



「ハミングプロジェクト」音のコミュニティ。それぞれの箱から聴こえるさまざまな人々のハミングによって、展示空間全体が満たされた。  
(2008年2月 神戸アートヴィレッジセンターにて)

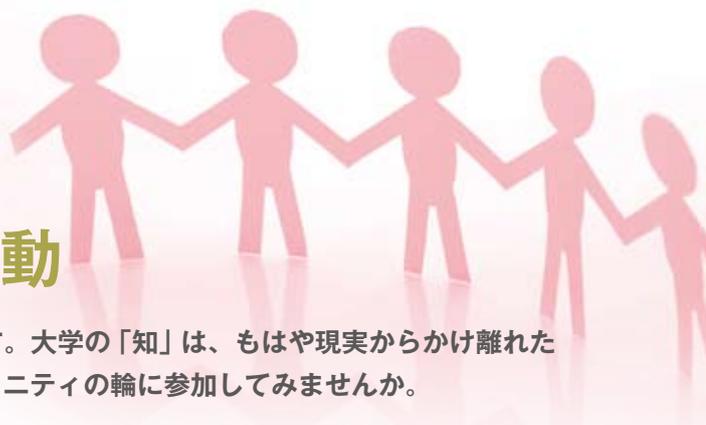
### 「接続可能な社会づくり」を目指す人材育成「ESD サブコース」

2008年度より、文学部・経済学部と協働して、領域横断型の新たなコース「ESD サブコース」を開講しました。ESD (Education for Sustainable Development) とは「持続可能な開発のための教育」のことです。発達科学部の学生は誰でも主専攻に加えて選択できるコースです。いのちの尊厳を基礎に、貧困・人権・開発・環境など「持続可能な社会の形成」に深く関連する内容を含みます。国連でも、2005年からの10年を「ESDの10年」として、世界中で取り組むことが決議されました。

ESD サブコースは、上記問題への解決能力を高めるため、野外調査や参加型学習を重視するユニークな学びの機会です。今、地域では、さまざまな人々が「持続可能な社会」を目指す活動に取り組んでいます。ESD サブコースを履修する学生は、そのような現場に出かけ、学外の人々と連携しながら、実践活動に参画します。教室内では体験できないリアルな問題解決の過程に出会い、五感を通して「今、ここで」を学びます。

発達支援論コース(ESD・青少年教育) 助教 高尾 千秋





# 人々がつながる教育・研究活動

“発達”の教育・研究は、積極的にコミュニティへ広がっています。大学の「知」は、もはや現実からかけ離れた世界のものではありません。読者の皆さんも、この新しいコミュニティの輪に参加してみませんか。

## コミュニティを豊かにする科学の可能性 「サイエンスショップ」

「サイエンスショップ」は、人々が科学をより身近なものとし、さらに市民の方々が「研究」活動等に取り組むのをお手伝いしています。南あわじ、伊丹、姫路、三田など、各地の市民の方々が開催するサイエンスカフェ（科学者と一般の市民が飲み物を片手に気軽に科学の話題について語り合う場）や、地域の科学教育への支援などの取り組みを進めています。活動を通して、コミュニティを豊かにする、科学の持つ新しい可能性も感じられます。学生も、天体観望会の開催など、活動への参加を通じて、コミュニケーションやプロジェクト運営などの力を高めています。

人間環境学専攻（宇宙物理学・科学教育）教授／サイエンスショップ 室長  
伊藤 真之



## 共生社会づくりを学生とともに カフェ「アゴラ」

発達科学部内に設けられたカフェ「アゴラ」は、教職員と学生のための福利厚生施設であり、また知的障害のある人たちが接客を通じて対人関係スキルなどを磨くための実習の場でもあります。学外の方も利用できます。まずは大きな声で「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」のあいさつ練習から。丁寧な言葉遣い、電話の対応、調理などを何度も練習することで自信を深めています。人と話す機会がとて少なかった実習生が多いのですが、「アゴラ」でのサービスを通じて多くの学生たちと少しずつ会話ができるようになり、笑顔も増えました。「アゴラ」は人が集い、つながり、みんなが育ち合う場です。

カフェ「アゴラ」スタッフ  
吉田収・富永恭世・東口たまき



# 未来へ

## 発達し続けるOB・OGたち

人と社会の「本当の豊かさ」とは何か——

“発達”の学生は、このテーマに各自の視点で取り組み、  
巣立っていきます。

社会で日々奮闘・活躍するもの、大学院でさらに  
学びを深めていくもの、  
多様な現場でそれぞれの個性を活かしています。

北海道教育大学教授・教職大学院長  
**福井 雅英** (2003年修了 博士(学術))

現職教師のまま博士課程に入学し、3年間で論文を書きました。何度かの挫折の危機は、指導教員であった船寄先生の、厳しくもあたたかい、何よりも粘り強いご指導のおかげで乗り越えました。問題関心を励まし、研究の言葉を紡ぎ出す援助をいただいたと感謝しています。現場感覚を大事にしなが、徹底して第一次資料にこだわるなかで、研究のオリジナリティが見えた気がしたものです。このような研究体験が、今いる教師教育の現場でとても有効です。文字通りの生涯発達援助実践なのです。



同志社大学准教授  
**阪田 真己子** (2002年修了 博士(学術))

「人間とは何か」という壮大な問いに立ち向かうために、現在さまざまな学際的取り組みがなされています。総合人間科学研究科(現・人間発達環境学研究科)はその先駆的な存在でした。私は、大学院在籍中に、ひとつの見方や方法論に固執せず、従来の学問分野の枠を超えて全体を見渡すことのできる包括的な視野を持つことで、初めて人間の本質を浮き彫りにすることができることを体感しました。新たな学問領域を創成するチャレンジングな研究に取り組んだ経験は、私の研究理念の礎となっています。



「音遊びの会」代表  
**沼田 里衣** (2007年修了 博士(学術))

「コミュニティ音楽療法」という、地域と関わりながら音楽療法の研究をしてきた私にとって、豊かな文化、風土のある神戸で学べたことは、本当に幸せなことだったと思います。人間発達環境学研究科には、サテライト施設である子育て支援施設「あーち」があり、そこで実践的な内容を自由に展開することができました。また、当時の院生仲間と始めた知的障害者とプロの音楽家のバンド「音遊びの会」は、ドキュメンタリー映画として公開されており、今の活動につながっています。



官公庁

研究者

社会福祉  
団体

裁判所

スポーツ系  
企業

NPO

俳優  
・  
パフォーマー

音楽家

美術家

商社

金融  
・  
保険業

マスコミ

情報通信系  
企業

教員

教育系  
企業

株式会社ワコール  
丹松 由美子 (2007年卒)

私が卒業した行動・表現学科(現・人間行動学科)には、座学の他に六甲山縦走や海洋実習などがあり、実習を通じて互いに協力し、共に泣き笑いしました。学年全員で同じ体験を分かち合うことで、より大きく成長することが出来たと思っています。授業以外の場でも、学年を超えて、教員もともに一体感に包まれる雰囲気は他にはなく、傍から見ると特殊に感じられたかもしれません。ここで学んだ人と人とのつながりの大切さや、助け合うことで成し遂げられた経験は、私の宝物であり現在の糧となっています。



神戸市企画調整局  
田中 雄一郎 (2001年卒)

より良い社会、より良い生き方とは何か? その実現のために社会が、一人ひとりができることは何か? そんな素朴ながら難解なテーマにチャレンジし続けた学生生活でした。結局それが原点となり、今の仕事を選択したのだと思います。

政治、経済、法律、歴史、地理、社会、思想…、あらゆる切り口から社会を眺めようというスタンスは学部での4年間で身についたものであり、社会生活を送るうえでの大切な糧になっています。



心身発達専攻  
プリマコウ カテリーナ (博士前期課程2年生)

神戸大学は歴史のある大学ですが、とてもアットホームです。毎年秋に人間発達環境学研究科が主催する「学術 WEEKS」は、魅力の一つです。さまざまな分野の先生方や学生、国内外の大学と交流することで、研究者及び社会人としての視点を広げることができました。さらに、専門家としての成長に必要な実践の場も、本研究科だからこそ提供できるものが数多くあり、その多様性を有難く感じています。ここで得た経験やつながりを胸に、社会で頑張っていきたいと思っています。



発達科学部は1992年に教育学部を、人間発達環境学研究科は2007年に総合人間科学研究科を改組して成立しました。学部、大学院が研究対象としている「人間」も「環境」も、ともに複雑で、多面的です。

学生たちは4年間、大学院生は2~5年間をこの「複雑なるもの」に取り組みます。時には実直に、時にはチャレンジングに。「ヒト」を知ることを通して、何よりも自分自身を「ハッタツ」させるために。

この特集は次の教員が担当しました。(50音順)

大田 美佐子 准教授、関 典子 講師、朴木 佳緒留 教授、  
宮田 任寿 教授、山下 晃一 准教授

## 『神戸大学百年史』全4巻が完結

神戸大学は、1902（明治35）に県下最初の高等教育機関として設置された神戸高等商業学校を創立の起点としており、百年を超える歴史を有しています。こうした百年の歩みを回顧し将来への展望を得るため『神戸大学百年史』全4巻の刊行が企画され、2010年3月に全巻が完結しました。

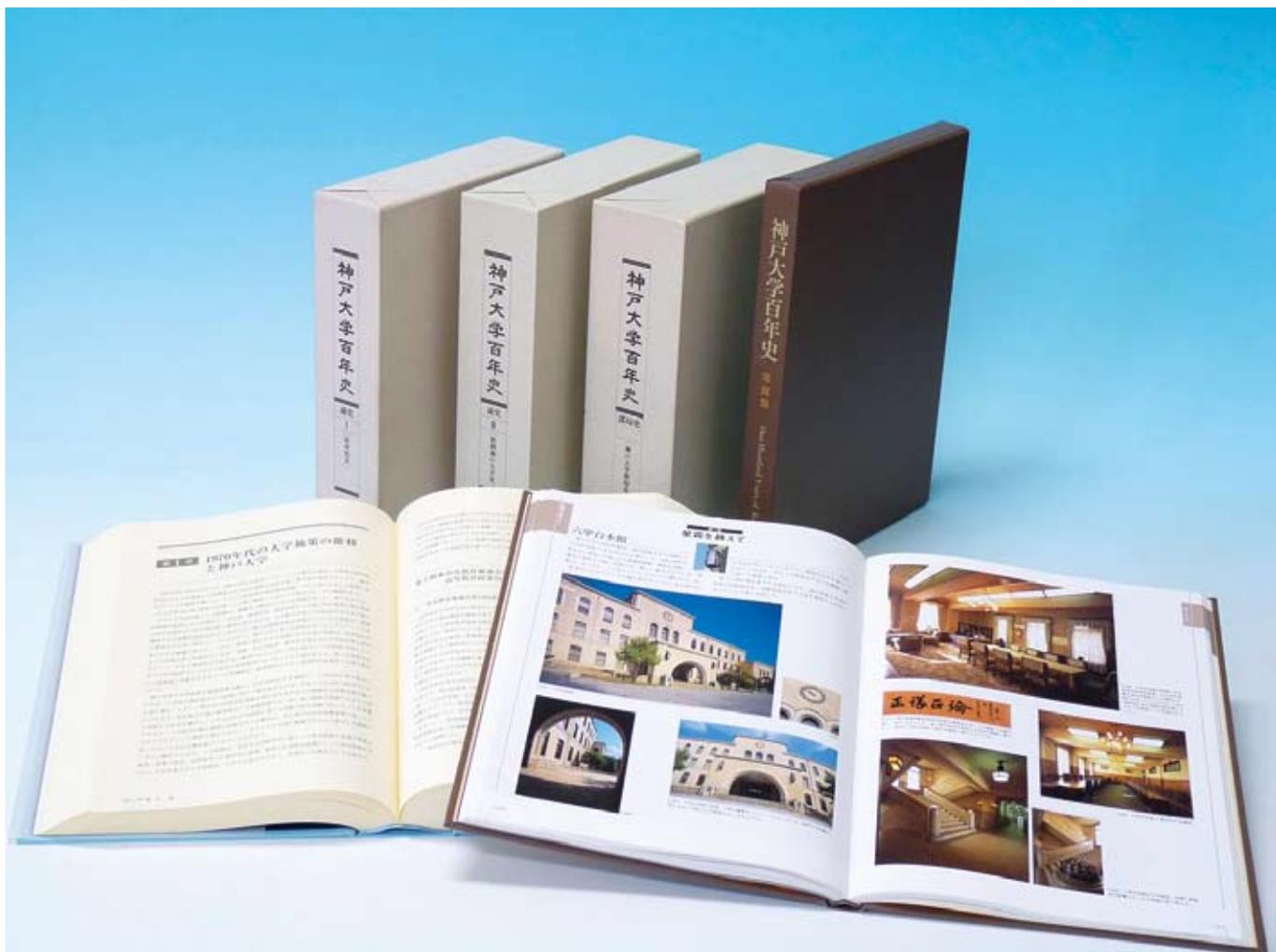
神戸大学百年史刊行事業の始まりは、21年前にさかのぼります。1989年4月、新制神戸大学の開学五十周年記念事業の一環として、五十年史の刊行が企画されました。翌年、本学の創立起点を1902年とすることとなり、開学五十周年は創立九十周年に、五十年史は百年史に変更されました。こうして神戸大学では、創立九十周年記念事業の一環として、全部局参加型の百年史刊行事業が開始されました。2002年に通史Ⅰ（前身校史）と写真集、2005年に部局史、2010年に最終巻となる通史Ⅱ（新制神戸大学史）がそれぞれ刊行されました。通史Ⅰでは、神戸高等商業学校をはじめとする数多くの前身校の歴史を取り上げました。写真集では、神戸大学の前身から現在までの足跡を、多数の貴重な写真とその概説および年表で分かりやすく紹介しました。部局史では、本学を構成する全部局のそれぞれの歴史を検証しました。通史Ⅱでは、戦後に新制国立総合大学として誕生した神戸大学

が、旧制大学の系譜を引く大学としての誇りと責任感を抱きつつ“真の総合大学”とはいかにあるべきかを追究し、今日の全国有数の総合大学に発展するまでの約60年間の軌跡を取り上げました。本書は神戸大学附属図書館、すべての神戸市立図書館、全国の都道府県立図書館、県庁所在地の市立中央図書館でご覧いただくことができます。

百年史を繙くと、現在の神戸大学が、先人たちのさまざまな理想やその実現に向けた努力の上に成り立っていることが感得されます。本学は、そうした歴史を踏まえ、国際都市神戸にふさわしい世界的に卓越した教育・研究拠点となるべく「グローバル・エクセレンス」の実現に向けて、さらなる発展をめざし邁進しています。

なお、百年史刊行事業の終了により、2010年3月末をもって百年史編集委員会（委員長は経済学研究科教授天野雅敏）と百年史編集室は解散しました。百年史刊行のために収集された貴重な史料は、4月1日に新設された附属図書館大学文書史料室に継承されています。

（神戸大学附属図書館大学文書史料室講師 野邑理栄子）



## 2010年度「育友会全学懇談会」を開催しました

2010年度の神戸大学育友会全学懇談会を6月12日、昨年10月に修復された出光佐三記念六甲台講堂で開催しました。当日は天候に恵まれ、ご家族で来学される方も多く、約320人の新入生保護者等の皆さまが出席されました。

最初に育友会を代表し、小倉正恒・新理事長が挨拶し、入会のお礼のあと、懇談会に先立つ理事会で承認された事業計画等について報告し、更なる育友会活動への協力をお願いしました。

続いて、福田秀樹学長が、この一年の神戸大学の歩みについて、トピックスを交え、報告しました。また、田中康秀副学長（教育担当）は、本学の教育ビジョンや教育に求められることなどについて話しました。石田廣史副学長からは、「学生生活について」と題し、大学と保護者の皆様との連携強化などをお願いしました。最後に、内田正博キャリアセンター長が、神戸大学の就職状況や学生への指導・サポート体制について話し、締めくくりました。

全学懇談会終了後は、各学部にて会場を移動し、学部別懇談会が開催されました。各学部とも修学状況、学生生活や進路状況について質疑応答があり、熱心な意見交換が展開されました。

（学務課）



## 2010年度「学友会幹事会」を開催しました

2010年度の第一回学友会幹事会を5月25日に開催しました。最初に、田中初一幹事長から2009年度神戸大学学友会事業報告及び収支決算の説明があり、審議の結果、原案どおり承認されました。

続いて、高崎正弘会長から神戸大学学友会支部登録申請承認について、デトロイトをはじめとした7支部から登録申請があり、2010年3月開催の常任幹事会において協議した結果、学友会支部として登録されることが承認された旨の報告がありました。学友会支部は、昨年12月に最初に承認された愛媛県支部を含め8支部になり、事務局からは今後学友会組織の拡充に向け、各地の同窓会支部等に積極的に働きかけていくことについて説明がありました。

大学側からの報告事項として、田中康秀担当理事並びに安藤幹雄学長補佐から、今秋10月30日開催の第5回ホームカミングデーの概要、入学試験結果や神戸大学基金の状況などについて説明がありました。

最後に、事務局から学友会ホームページの改訂作業が6月中に完了すること、及び改訂された内容等について報告がありました。

詳細については、下記HPをご覧ください。

<http://www.kobe-u.com/alumni/dousoukai.html>

（社会連携課）



神戸大学学友会愛媛県支部

### 神戸大学学友会支部に登録された支部名（平成22年5月現在）

|              |
|--------------|
| 神戸大学学友会愛媛県支部 |
| デトロイト        |
| 島根県神戸大学学友会   |
| 神戸大学クラブ（KUC） |
| 神戸大学学友会大阪クラブ |
| 神戸大学学友会鳥取県支部 |
| 神戸大学北海道同窓会   |
| 神戸大学福井県校友会   |

# 保健管理センターだより



## 長引く咳に注意を！

### ・・・忘れていませんか？ 結核のこと。

遠い昔の病気のように考えられがちな結核。しかし、現在でも世界人口の約3分の1が感染していると言われ、日本国内だけで毎年2万人以上の患者さんと2千人以上の死者が出ています。人口10万人あたりの新規患者数は19.4人(平成20年1月～12月)で、日本は未だに結核蔓延国の域を脱していません。神戸大学でも定期健康診断の機会などに、活動性結核(治療が必要な結核)と診断される方が毎年3名程度、発見されています(左下表、参照)。2週間以上にわたって咳が続く時、「長引く風邪」のような症状のある時、百日咳とともに結核の可能性を考えてみてください。

#### 結核ってどんな病気？

結核は、咳やくしゃみによって飛び散ったしぶき(飛沫)や、飛沫が乾燥した飛沫核に含まれる結核菌を吸い込むことによって感染する病気で、大部分は肺結核ですが、腎臓や骨など肺以外の臓器が侵される肺外結核もあります。教室や研究室など、閉めきった狭い空間で感染しやすく、最近ではカラオケボックスやインターネットカフェなどでの感染も多いと言われています。結核菌に感染しても発病するのは約10～15%の人で、睡眠不足や栄養不良、ストレス、他の病気などで免疫力が低下していると発病しやすくなります。感染してから発病するまで通常半年以上かかり、微熱や疲労感、咳、痰、胸痛などが始まります。「暑くもないのに寝汗をかく」とか、「最近疲れやすい」、「食欲がない」、「体重が減る」などといった程度のこともあります。やがて、咳やくしゃみ、痰とともに結核菌を体外に排出(排菌)するようになりますが、排菌状態になるまでには通常半年から1年以上かかるとされています。

| 年度     | 活動性結核患者数(人) | 留学生        | 職員 | 排菌者 |
|--------|-------------|------------|----|-----|
|        |             | (左記の内数)(人) |    |     |
| 平成12年度 | 6           | 1          |    | 2   |
| 平成13年度 | 4           |            |    |     |
| 平成14年度 | 6           | 1          | 1  | 1   |
| 平成15年度 | 3           | 1          |    | 1   |
| 平成16年度 | 3           | 3          |    |     |
| 平成17年度 | 3           |            |    | 1   |
| 平成18年度 | 3           | 1          |    |     |
| 平成19年度 | 3           | 2          |    |     |
| 平成20年度 | 1           | 1          |    |     |
| 平成21年度 | 2           | 1          |    | 1   |

#### 神戸大学における最近10年間の活動性結核患者の発生状況

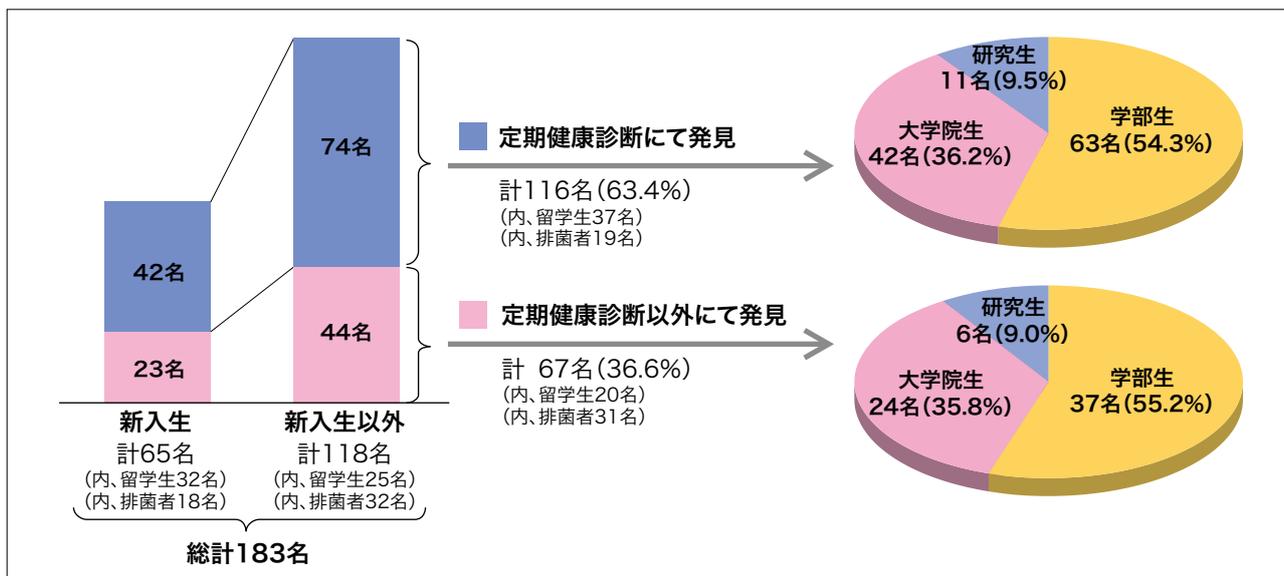
旧神戸商船大学(平成15年10月から神戸大学海事科学部・海事科学研究科)分を含む。平成12年7月と平成13年2月には排菌状態となった患者を発端とする集団感染や小規模感染が発生し、各々23人と12人が結核の発症を防ぐ薬を予防内服した。

#### 健康診断で早期発見、入院せずに治療を！

排菌状態になってしまうと、入院して治療を受けなければなりません。一方、定期健康診断などで胸部レントゲン撮影検査を毎年受検していると、排菌状態になるまでに発見されることが多くなり、修学や就労を続けながら通院で治療できる可能性が高くなります。全国の国立大学法人を対象とした4年間の調査でも、活動性結核の方の約2/3は定期健康診断で発見され、排菌状態であった方はその内16.4%(116名中19名)でしたが、定期健康診断以外で発見された方では排菌状態の方が46.3%(67名中31名)にもなっています(右上図、参照)。また、たとえ排菌状態で発見された場合でも、早期であれば入院期間が短くて済み、学業や仕事を休む期間を最小限にすることができます。定期健康診断を毎年受検することが、とても大切なのです。結核はきっちり治療すれば治る病気ですが、服薬を途中で止めてしまったり不確実にすると、薬の効かない耐性菌ができて治療が長引いたり、死に至ることもあります。全く治療せずに放置した場合には5年以内に約半数が死亡するとされています。

#### 「排菌者」発生時の接触者健康診断は・・・

排菌状態の方(排菌者)が見つかった場合には感染症法に基づいて、家族などの同居者をはじめ、履修登録されている授業や、所属の研究室・課外活動団体、アルバイト、交友関係等の状況から、患者さんと一緒に過ごす機会が多かったり時間が長かった方について、結核菌への感染の有無を調べる接触者健康診断が実施されます。もちろんプライバシーや人権の保護には最大限の配慮が払われます。接触者健康診断の目的は、症状がなくても感染している可能性のある方(潜在性結核感染者)を早期に発見して発病を防ぐ治療(予防内服)をしたり、発病している場合でも、できれば排



国立大学法人における活動性結核患者の発生状況 (参考文献 1 より改変)

活動性結核患者の約 2/3 は定期健康診断で発見され、約 1/3 が定期健康診断以外で発見されている。定期健康診断で発見された者では、定期健康診断以外で発見された者に比べて排菌者の率が少ない。また、全体として新生児よりも新生児以外の患者の方が多い。

菌状態になるまでに発見・治療して感染の拡大が起らないようにすることにあります。場合によっては、最初に発見された方(初発患者)よりも病状の進んだ方が見つかり、初発患者もその人からの感染であったということもあります。

接触者健康診断では胸部レントゲン撮影検査やQFT (クオンティフェロン TB-2G、QuantiFERON TB-2G) 検査が行われます。QFT 検査は、血液検査によって結核菌への感染の有無を速やかに判定できる検査で、従来のツベルクリン反応検査に替えて用いられるようになってきました。日本のように結核の予防接種としてBCG接種を幼少時に行っている国では、結核菌への新たな感染がなくてもツベルクリン反応検査が陽性を示す方が多く、接触者健康診断では特に強い陽性を示す集団がある場合にのみ結核菌への感染を疑ってきましたが、QFT 検査を用いるとBCG接種の影響を受けることなく、結核菌への感染の有無を約 90% の確率で診断することができるのです。

### 結核感染から自身と周囲を守る！

結核菌への感染や発病の可能性は幼少時のBCG接種によって下げることができます。それに加え、日常から睡眠不足や栄養不良を避け、上手にストレスを解消しておくことも大切です。そして、2週間以上にわたって咳が続く時、「長引く風邪」のような症状のある時、体調不良が続く時は結核のことも考えて医療機関を受診するようにしましょう。また、結核に限らず、咳がある時には「咳エチケット」を励行してください。そうすることで、周りの人への感染の機会を少なくすることができます。また、部屋の窓を 10 cm 程度開けておくだけでも、感染の確率が下がるといわれています。人類の

歴史は「感染症との戦いの歴史」とも言われます。その戦いは今も続いていますし、今後も続くことでしょう。正しい知識とその実践が自分自身や周囲の人達を感染症から守ることに繋がるのです。

#### 参考

1. 木村純子, 他: 新生児と新生児以外の活動性肺結核患者の発生状況から見た, 学校保健法施行規則改定の問題点について, CAMPUS HEALTH 43(2): 77-82, 2006
2. 結核予防会結核研究所疫学情報センター編, 結核の統計 2009
3. 結核予防会編, 感染症法における結核対策 ~保健所の手引き~ (平成 20 年改訂版), 2008
4. 神戸市保健所, 結核ハンドブック, 2009

### 保健管理センターは…

六甲台キャンパス(本部管理棟2階)と深江キャンパス、楠キャンパスにあり、毎年の健康診断やその結果に基づく再検査・精密検査をはじめ、日常の救急処置、健康相談(「からだの健康相談」、「こころの健康相談」)、保健指導、健康教育、産業医活動、調査研究活動などを通じて、学生や職員の皆さんの健康をサポートしています。また、名谷キャンパスには「からだの健康相談」のための保健管理室と「こころの健康相談」室が設置されています。

#### ● お問い合わせ

〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
 [神戸大学保健管理センター] ☎ 078-803-5245  
 〒 658-0022 神戸市東灘区深江南町 5-1-1  
 [神戸大学保健管理センター深江分室] ☎ 078-431-6232  
 〒 650-0017 神戸市中央区楠町 7-5-1  
 [神戸大学保健管理センター楠分室] ☎ 078-382-5006

#### ● 保健管理センターだより 77

(神戸大学広報誌「六甲ひろば」から引き続き連載)  
 保健管理センターの詳細につきましては、  
 保健管理センターホームページでも案内しています。  
<http://www.kobe-u.ac.jp/medicalc/index-j.html>

神戸大学のキャンパス〈その1〉

六甲台地区

神戸大学キャンパスは4つの地区に分かれている。

いずれも神戸市内にあり、六甲台地区、楠地区、名谷地区、深江地区と称される。

今回はその一つ、六甲台地区を取り上げてみたい。

■ 学内最大のキャンパス

六甲台地区は学内最大のキャンパスである。全11学部・14大学院研究科のうち9学部・10大学院研究科がここに集まる。土地面積43万7,268㎡、六甲山中腹に位置し、灘区六甲台町、同区鶴甲1丁目、同3丁目にまたがる広大な敷地を有する。学長室がある本部事務局や学内唯一の附置研究所もあり、本学の中心的な地区となっている。

■ 誕生

六甲台地区の歴史の始まりは80年前にさかのぼる。当時ここは灘区高羽嘉太夫新田\*\*と称され、赤松の木々が聳立する山林地帯であった。1930(昭和5)年1月13日、地鎮祭の歛入れにより旧制神戸商業大学の新敷地造成工事が開始された。翌年に新学舎の建築が始まり、1934(昭和9)年7~8月に旧所在地の葺合区野崎通1丁目(現中央区野崎通、神戸市立葺合高等学校敷地)から移転した。こうして大学キャンパスとしての歴史が動き出すのである。当時建築された本館・図書館・兼松記念館・講堂は、現在、国の登録有形文化財となっている。

■ 学舎の統合

1949(昭和24)年に神戸大学が誕生した当初、六甲台地区は現在ほどの広大な敷地ではなかった。ここに設置されたのは、大学本部および旧制神戸経済大学(旧神戸商業大学)の系譜を引く法学部・経済学部・経営学部・経済経営研究所のみであり、他の学部は県下各地に散在していた。当時六甲台地区では学舎の一部が連合国軍に接収されており、立入禁止区域が設けられていた。接収解除は1952(昭和27)年である。現在の文学部・理学部・農学部の所在地にも、1958(昭和33)年まで連合国軍の住宅地「六甲ハイツ」があり、軍人とその家族が居住していた。学生の中には生きた英語を学ぶため、ここで芝刈りなどのアルバイトに精出す者もいた。

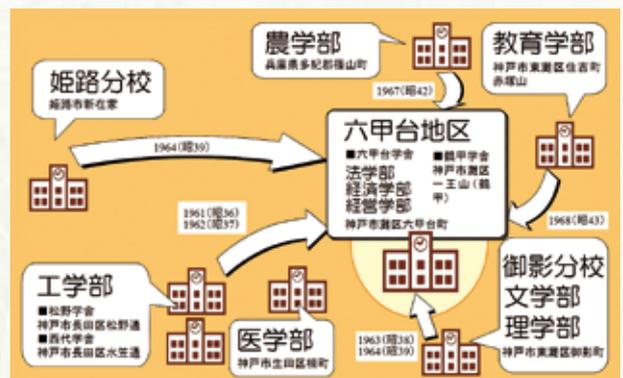
いわゆる「タコ足大学」として発足した神戸大学にとって、分散している学舎を1ヵ所に集める“学舎統合”は、開学以来の大きな課題であった。最初に六甲台地区への移転が行われたのは工学部である。1960(昭和35)年に着工し、2年後に移転が終了した。その後、教養部(現国際文化学部)、文学部、理学部、農学

部、教育学部(現発達科学部)の順に六甲台地区への移転が行われ、1968(昭和43)年12月に完了した。こうして六甲台地区は名実共に学内最大のキャンパスとなったのである。

(神戸大学附属図書館大学文書史料室講師 野呂理栄子)



学舎統合途中の六甲台地区 1964(昭和39)年頃



学舎統合図

\* 前回までは「神戸大学百年史編集室だより」として連載していたが、2010(平成22)年3月末に百年史編集室が廃止され、4月に新しく附属図書館大学文書史料室が設置されたことによりタイトルを変更した。

\*\* 1952(昭和27)年3月に高羽嘉太夫新田から六甲台町に地名変更された。

ニューカレッジソング  
光と風のハーモニー from Kobe

津田 薫 作詞  
内藤雅子 作曲

みどりの - こもれびか おをあげひか  
りの - ゆくえを みつけようたい  
ようのみち あるいていこう そば  
にあるとも の えがおとともに どこ  
までもどこまでもどこまでも

- 一、緑の木漏れ日 顔を上げ  
光の行方を みつけよう  
太陽の道 歩いていこう  
そばにある 友の笑顔と共に  
どこまでも どこまでも どこまでも
- 二、桜の小径を 駆け抜けて  
やさしい春風 感じよう  
花びらの道 歩いていこう  
そばにある 友の笑顔と共に  
いつまでも いつまでも いつまでも
- 三、水色の風は 海からの  
贈り物この手に受け止めよう  
虹色の道 歩いていこう  
そばにある 友の笑顔と共に  
これからも これからも これからも  
神戸の光と風と共に

神戸大学応援団総部創立50周年記念事業の一環としてつくられた。歌詞は2009年夏に公募され、文学部4年生（応募当時）の津田薫さんの作品が入選した。作曲の内藤雅子さんは応援団総部吹奏楽部OG。2010年5月3日の神戸大学応援団総部の創立50周年記念式典・祝賀会で初披露された。

(応援団総部)



<http://www.kobe-u.ac.jp>

神戸大学広報室 発行 2010年 10月 15日

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL.078-803-5022 E-mail : ppr-kouhousitsu@office.kobe-u.ac.jp